

都市空間の構想力

空間文化
の博物学

東京

最終回

東京大学都市デザイン研究室



安藤広重「近江八景之内 堅田落雁」(『広重の三都めぐり 京・大坂・江戸・近江』(人文社、114頁))

一瞬を永遠化する都市空間を求めて 情景が意味を伝え、形が時間を表現する

西村幸夫(東京大学教授)

風景の八景的認識

日本にあまたある「八景」のルーツは11、12世紀の北宋の瀟湘八景であり、日本へ伝わって近江八景として翻案され、それが江戸時代に浮世絵の名画とともに各地で花咲いたことはよく知られている。

湖南省にある洞庭湖周辺の景勝地を詠んだ瀟湘八景とは次のような八つの景である。

- 瀟湘夜雨 煙寺晚鐘
- 遠浦帰帆 山市青嵐
- 洞庭秋月 平沙落雁
- 漁村夕照 江天暮雪

ここで注目すべき点はふたつある。ひとつは、これらの風景が季節と時刻とともに謳われている点である。つまりこの時代の感性として、風景を、快晴・順光といったいわば絵がぎきたる固定した条件のなかで

とらえるのではなく、時の移ろいの中で認識しているということに特色がある。そしてそのことはこれらの観照の背後に、当然ながら、生活者の営みがあるということを示唆している。こうしたものの見方が日本近世の風景観におおきな影響を及ぼしたのである。

そしてもうひとつは、この八景がこうした個別的瞬間的な視点を有するというきわだつた個性を持ちながらも、そしてそれぞれの景勝地はそれなりに同定される場所としての固有性を持つにもかかわらず、歌として挙げられた地名は「平沙」や「遠浦」、「山市」や「漁村」など、つとめて一般化した場所とされていることである。詳細な時象と匿名性を帯びた土地、この奇妙な取り合わせは何を意味しているのか。

推測をたくましくするならば、意

味を持ったある特定の瞬間を浮上させるために、固有名詞を持った景勝地をあえて曖昧にしたのではないだろうか。いわば時間のために空間を抑えたのである。瞬間の意味と分ちがたく結びついた空間——というものから出発する風景観が中国にかつてあり得たのである。

日本への八景的感性の移植

これが日本に移植されるとどうなったか。初期の代表例であり、その後ももともとも有名な八景となった近江八景は次のように八つの景を謳っている。

- 唐崎夜雨 三井晚鐘
- 矢橋帰帆 粟津青嵐
- 石山秋月 堅田落雁
- 勢多(瀬田)夕照 比良暮雪

瀟湘八景とはほぼ同様の構図であり、浮世絵もそのように描かれる。しかし、両者の間には決定的な差異があることに容易に気づく。近江八景には固有の地名が例外なく謳い込まれているのである。

近江八景の作者はオリジナルな画題をもっともよく体現している風景

を琵琶湖南岸で探したのである。したがって八景は固有名詞を軸に謳われることになる。八つの瞬間であった瀟湘八景は八つの地点の景として、近江の地に、さらには日本全国に根付いていくことになった。

これが近江八景として定着していく中で、風景を観賞する物語を与えられた場所、見方をあらかじめ設定された名所として八地点が認識されるようになっていったのである。

この時、風景は「見方」、あるいは「見頃」を与えられたのだ。つまりこの風景は見者という主体に見られた風景なのである。

時間をとらえる主体のいる風景

例えば詩歌から和食の盛りつけに至るまで、日本の文化の多くは季節の気配などの時間の変化をとらえることに深い関心を払ってきた。風景も例外ではないだろう——風景を観る場所においてはではなく、ある特定の場所において過ぎゆく一瞬を生け捕り、場の移ろいとしてとらえること、同時にそのように受感する主体がいること、ここに日本の都市空

間の構想の根源が、少なくともそのひとつが、あるのではないだろうか。

こう考えると広重の近江八景の浮世絵をはじめとして日本の風景画のほとんどに日々活動する人の面影が描かれているのも合点がいく。この風景の見者が感情移入できる点景としての生活者が必要なのである。

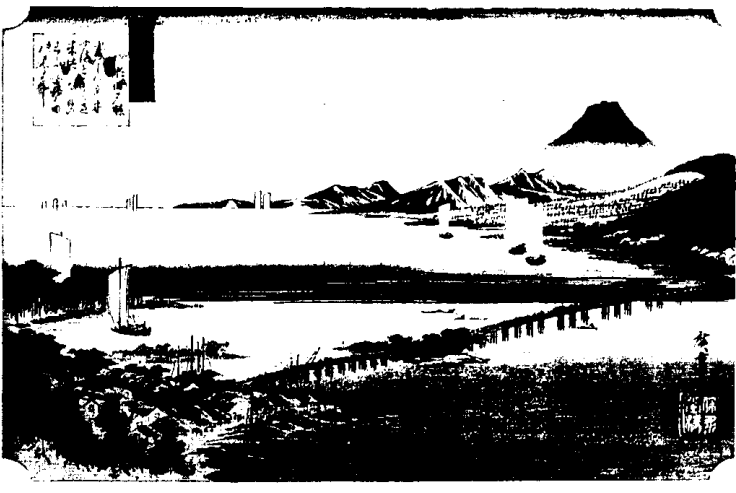
では、そのような感性を現代都市においてどう生かすことができるのか。

風景が見頃を持つということは、見頃を感じる主体がいるということである。一日の変化や四季の移ろいの中に物語を見いだし、これを賞める感性を鍛えなければならぬ。

と同時に、こうした瞬間の情景に形を与えるような生活空間の演出が都市空間を忘れがたいものにする。都市と自然の共生の問題もこのような深層から組み立てるべきである

う。

変化するものを一瞬生け捕ることを通して、永遠を実感する契機が与えられる。生活者の眼を通して、利那の物語は久遠の都市空間のなかに封じ込められることになる。空間が時間的意味を持つのである。こうした空間の構想力はひとつの物語というをもつことになるのだ。



安藤広重「近江八景之内 瀬田夕照」(『広重の三都めぐり 京・大坂・江戸・近江』(人文社、118頁))

人の手によって紡がれた都市空間の中にも、人智を超えた変化や情景がある。時々刻々と変化する天候や気候は、管理できないながらも、都市の魅力的な情景に改めて気づかせてくれる。同時に、この一日における移ろいを受け取るための都市空間は、光と影を取り込むことで、さらに興行きのある情景をつくり出す。

図1 太陽光と木陰の織りなしによって常に光空間と陰空間が共存する表参道の並木道。朝方には南西側(写真右)に、夕方は北東側(写真左)に木陰を落とす



図3 月見の風景は水とともに描かれる(歌川広重「名所江戸百景」「浮世絵「名所江戸百景」複製物語」芸州堂)

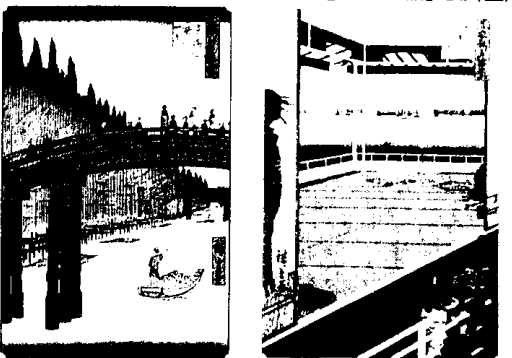


図2 ガラスファサードの淡い壁面には、直接映し込まれたケヤキと、光が生み出した陰の移ろいが混ざり合い、都市に森を創出する



図4 神楽坂の石畳の路地では、雨による薄い皮膜に光が映り込む



図5 日比谷公園の映り込み

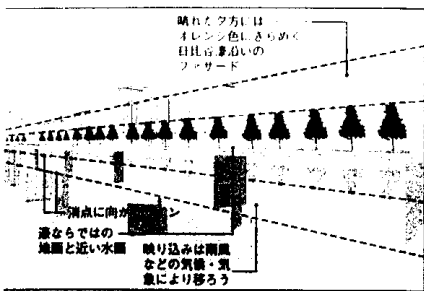


図6 夕刻の日比谷濠から西を望めば、夕陽にきらめく水面に出会い、思わず足を留める(6月撮影)

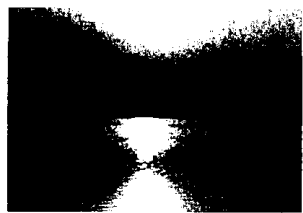


図8・9 雨の日、風の日に現れる水面の移ろい

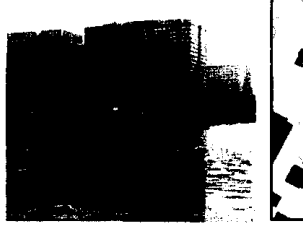


図7 日比谷濠と映り込むファサードの位置関係

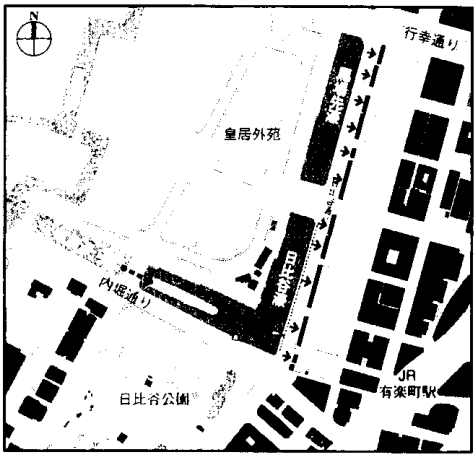


図10 風の日の日比谷濠。濠ならではの動かぬ水面は、鏡のように都市を映し込む

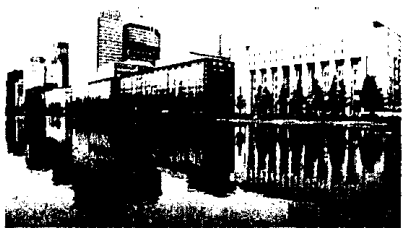


図11 風にさざ波の立つ日比谷濠の水面を照らすビルや街灯の照明



図12 大手濠を望むパレスサイドビル。都市の映り込むガラスのファサードが、水面にさらに映り込む



●「陰」が時の流れを空間に映し出す

都市空間に注がれる太陽の光は、日常生活に失われがちな「時の移ろい」への感度を高めてくれる。太陽の位置・高度(角度)と、これを受け取る都市空間との位置関係が絶妙に変化することで、都市には、様々な表情が生まれる。ここに、光が生み出す「陰」のコントラストが加わると、移ろいの情景はさらに際立つ。

並木道の木陰は、こうした陰の移ろいをより強く感じさせる空間である。細やかな枝葉の重なりが光を柔らかく分散させ、揺れる木漏れ日が、都市を吹き抜けるそよ風の存在を露わにする。この光の変化に、気象の変化が重なる。そこには、二度と現れる事のない時空体験が生まれる。

戦前から続くケヤキ並木の中でも東京有数の美しさを誇る表参道では、等間隔に植えられた2列のケヤキから抜き出た木陰が、晴れていれば、必ず光の空間と陰の空間が共存した心地よい世界を創り出す。南東から北西の明治神宮へと向かうこの参道には、朝方は南西側の沿道に並木の陰が落ち、その後、徐々に北東側の沿道に木陰の揺ら

めきが映る(図1)。光と影の混ざり合うその情景は、時間とともに変化し、その割合は、季節によっても変化する。さらに、この情景への感度を高めているのは、絶妙な距離感で対峙する並木と沿道建物達との関係性である。控えめな陰を浮き立たせる淡色系の壁面や、ガラスファサードによる透明な街並みには、直接に映り込むケヤキの緑と光を浴びて映る木陰とが混ざり合い、揺らめく情景が最大限に増幅される(図2)。

●水面への映り込みが情景を増幅させる

天候や気候によって移ろう情景を都市空間に取り込む光の現象の一つに、「映り込み」がある。生け捕られた風景と現実の空間をともに眺めることで、都市の魅力は幾重にも広がる。

特に、「水面」は上空の変化をも映し込み、毎日違う風景を作り出す。古くから、月見の名所は必ずといっていいほど水辺であり、鑑賞すべき対象とともに、映し込まれた鏡像を同時に眺めることで、瞬間と移ろいをより深く味わうことができる(図3)。

また、雨に濡れた路面は、薄い皮膜として瞬間的に現れる水面である。神楽坂をはじめとした石畳の路地が雨に濡れると、光や周囲の風景が映りこみながら、石畳の粒子がこれを情緒的にぼやかせ、水溜りに切り取られる都市の姿は、何気なく接していた都市空間を再認識させる(図4)。

密にデザインされている。美観地区時代から受け継がれる百尺(31m)の統一された街並みは、水面に映ることによって、消点へと向かうラインの美しさが強調され、その存在感を存分に発揮する(図5)。

海、川、池、水路など、都市に散在する水辺の中でも、より映り込みが効果的な水面の一つに、「濠」がある。川などと異なり、流れることもなくとどまり続ける水面は、静寂な風の時間には、鏡のように滑らかとなり、都市の鏡像はクリアなエッジを際立たせるが、ひとたび風が吹くと、さざ波で水面は揺れ、鏡像はノイズで曖昧となる。あまりに強い風が吹くと、その鏡像は消去されたかのように原型を失う。雨が降れば、波紋がまた異なるノイズとなつて鏡像を揺り動かす。

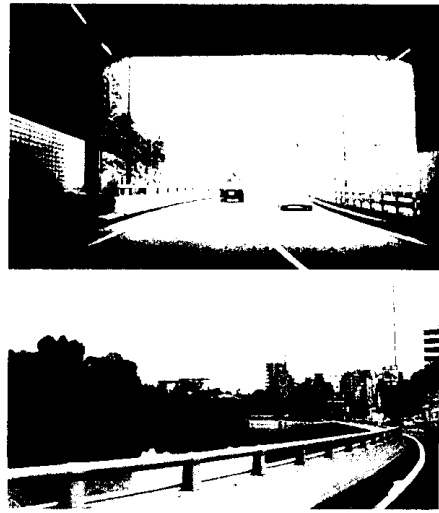
古くから「映りこみ景」の親しまれてきた空間に、日比谷のお濠端がある。

濠というコントロール可能な水面は、現実の都市空間と映り込んだ姿との距離を限りなく近づける。また、その水辺の存在を受ける沿道の街並みも、緻

生け捕られる日比谷濠の情景も、時々刻々と変化する。特に、夕刻の風景には目を見張る。東を向けば、オレンジ色に輝く荘厳なオフィス群と優しく映し出される鏡像が見え、西を向けば都市に落ちる夕陽のきらめく水面の眺められるという、情景のコラボレーションに、仕事帰りのサラリーマンもふと目を奪われる。日が落ちるのを待てば、空は光と闇の混じり合う甘美な色彩を放ち、ほとりの木々も街の明かりもそのままに映し出す水盤が、わずか5分ほどの「魔法の時間」を閉じ込める。さらに時が過ぎれば、人々が生み出す光で彩られた夜景の街並みと映りこみとの競演に出逢う。

情景を閉じ込めたその空間は、都市の揺らめきが幾重にも「増幅」されることで、同じ場所にながらにして、都市の刹那を何度も感じさせる空間となる。(野原 卓)

図4 トンネルの先に見える千鳥ヶ淵



⑤千住の市街地



図3 千鳥ヶ淵と高速道路の位置関係 (Google Earthより作成)



④荒川を渡る



③中央環状線の高架



●断片の情景が光の中に立ち現れ、時間の流れに消えていく
都市空間に織り込まれた自然の情景は、都市内のコントラストとして、断片的に存在している。瞬間的にそこを通り抜ける時、その情景は都市空間から一枚の絵のように切り取られ、浮かび上がる。

図1 丸の内線から見た聖橋



②綾瀬の市街地



①綾瀬駅



図2 北千住から綾瀬間の車窓風景・市街地から川に出て、視界が開けた後、再び市街地に戻る

●記憶に残る一瞬の情景

額縁に収まった一枚の絵のような都市の情景。それは時として、一瞬の出来事の中に現れ、我々の感情を喚起し、記憶に強く残る。刻々と変化する時間の流れの中で、二度と見られないのではないかと感じられ、個人的な思い入れが強まる景色がそこにはある。

ここでは、車窓という額縁が切り取る情景を考えてみよう。電車の中から、建築群の切れ目に自然が生み出す都市の情景を、思いがけず発見することがある。しかし、電車は自分の意志で止められず、不可逆ゆえの強烈な印象となる。山手線を1周してみると、谷中霊園の聖的な雰囲気、上野の森や皇居の緑、万世橋が架かる神田川、品川の御殿山などは、それまで窓の外を流れていた都市景観のアクセントとなり、我々の脳裏に焼きつくのである。

●暗闇から明るみ、また暗闇

川端康成は小説『雪国』の冒頭で「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」と、印象的な雪国の情景の入り口をトンネルに託した。ある暗い空間から明るい次の空間へとくぐり抜

けていく。その「暗」から「明」へと変わる一瞬、そこに情景を見出す。

地下鉄丸の内線に乗り、淡路町から池袋方面を目指す。御茶ノ水駅に差し掛かると、暗かった地下から一瞬、日光にさらされ、地下を走っていたにも関わらず、神田川の水面が目の前に広がった深谷に飛び出る。船を漕いでいるかのような水面の近さに驚きつつ、水の煌きが聖橋のそのラウンドした腹部に反射しているのを見上げる。JR駅を発着する電車や人の往来を横目に気持ちが悪わつすが、また暗い地下の中へと戻っていく。

この間、5秒とかからない。眼前に開けた空間は、まるでシャッターを切ったように車窓から情景として切り取られ、そこに閉じ込められる。次は電車からではなく、自動車からの情景を見よう。戦後、東京は交通混雑の緩和のために既存の都市空間の隙間を縫うようにして、首都高速道路を建設した。様々な条件をクリアしつつ造られた首都高は、地形の機微を組み込みつつ、高架、地下、旧掘割と様々なアップダウンによって、印象的な景色を我々に見せてくれる。

首都高速都心環状線の内回り、竹橋JCTを越えたところで、北の丸公園下のトンネルを潜る。このトンネルは距離にすると短く、200mほどである。つまり、次の空間までのわずかな暗転、前振りになっているのだ。

そして、トンネルを右にハンドルを取りつつ駆け登り、外に抜け出てみると、空が開けているのが、光の束となつて目に入ってくる。まぶしさに目を細めつつ、車が緩いS字カーブのへそに差し掛かると、左手に皇居の緑に囲まれた千鳥ヶ淵が見える。手が届きそうなほどの水面との距離。ここは左側の走行車線を行きたい。そのまま左にハンドルを切りながら、坂を一気に下ると、池に吸い込まれるようにして、トンネルから地下へと入っていく。一時の水と緑との戯れは静かに終わる。

●市街地の切れ目から射し込む光

光が突然降り注ぐのは、トンネルをくぐり抜ける時だけではない。電車が川を渡る瞬間は、家並みで遮られていた視界が開けて突然川面が広がり、太陽の光が降り注ぐ。それが夕暮れ時ならば、川面に反射し一層輝きを増す。

千代田線綾瀬駅から北千住に向かう電車からまず見えるのは、雑居ビルの壁面に、乗客の目の高さに取り付けられた色とりどりの看板である。やがて車窓の外を流れる景色は低層の住宅へと変わる。眺めを遮っていた建築群は、荒川の鉄橋に差し掛かると、突如姿を消し、目の前には水面が広がる。

川の流れる沈みゆく太陽の光を導き、車内を赤く染める。車内に細く延びた乗客の影が、レールの動きに合わせて、揺れる。夕陽を抱えた電車が橋を渡り切ると、すぐにまた車内は、暗さを取り戻す。鉄橋を渡る車輪とレールの音が低く、遠くに鳴っていく。

車窓から捕らえる自然の情景は、季節や天気、時間によって、毎日違った表情を見せる。夕暮れ時、西から東に流れる川面に陽が沈み、暮れなずむ様子は、特に美しい。この一瞬を逃すと、同じ情景を手に入れることは決して適わない。同じ色の夕陽など二つとない。流れ行く時間の中、都市を移動する人間。そこで垣間見える自然は、人間の意識、無意識に関わらず都市の中に閉じ込めた情景である。

(中島伸・田中睦子)

● 移ろい繁茂する草木の景が、都市の多様な時間を照らし出す

我々の生きる都市空間は、季節の潤いをもたらす草花や樹木を内包し、時を刻んでいる。変化する環境の中で、繁茂し続ける植物の景に、日常生活から地域の営みまで、多様な時の流れを見出すことができる。

図1 街道の記憶を留める一里塚の榎（北区西ヶ原）



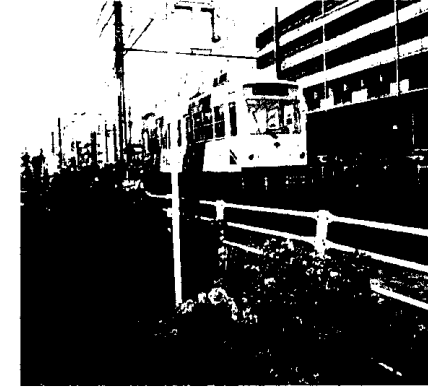
図4 生活動線となっている白山神社境内に咲くあじさい（文京区白山）。境内は地域の生活動線となっている



図2 通りからかいま見る路地の花々（右）
図3 軒先の植樹帯に植えられた立葵（左）



図5 都電の線路沿いを彩るバラ（荒川区）



● 植物が照らし出す都市の時間
季節の変化を植物の移ろいに見出し、それを都市環境に積極的に取り込む文化的傾向は、四季折々の表情を見せる苑地や境内をはじめ、軒先の花々、敷地を縁取る樹木、並木や植込み、地勢に寄り添う樹林地等、都市に多様な植物の景をもたらしてきた。
特定の場所に繁茂し続ける植物はまた、年を越えた大きな時の流れを認識させる存在でもある。新陳代謝を繰り返しながら変わらぬサイクルを刻み続ける植物は、同時に年を重ねてゆく物的空間との対照を成す。境内の老樹や一里塚の樹々が雄弁に物語るのは、土地の大きな記憶である（図1）。
植物とともに在る空間に浮かび上がる情景から、我々は、都市に流れる多様な時間を感じることが出来る。
● 花咲く風景に潜む地域の営み
春から夏にかけて、身近に草花を愛でる園芸文化の遺伝子が、まちの至る所で認識される。路地や軒下、街路樹の足下といった小さな空間に設えられた花々は、日常世界に彩りある情景を創り出す（図2、3）。住人によって

手入れの施された草花は、その場所での暮らしの住まいのあり方を映し出す。ふと目に留まるこれらの景は、花や緑の瑞々しさと共に、軒先を埋め尽くすような繁茂の様相により印象づけられる。限られた空間を最大限に使い込みながら、季節を取り込んできた暮らしの年月がもたらす情景である。
大衆が季節の花々を楽しむ場として、桜の他にも、様々な名所が創出された。梅、つつじ、菖蒲やあじさい等、「花の名所」として知られる社寺が、都内には今も点在している。かつての行楽地であった境内は、都市化の中で、地域の生活動線に取り込まれている場合も多い。通りがけに目にする境内の花々の情景は、そこに流れる時間の奥行きをも伝えてくれる（図4）。
時間をかけて育まれた花の名所は、まちの歩みの中にその景を定着させる。都電沿いには、6月になると鮮やかなバラが咲き乱れ、市街地を細やかに走り抜ける電車の車窓を楽しませる（図5）。このような沿線の景は、交通と観賞の空間を兼ねた都電とともに受け継がれることで、地域の日常に根ざした風物詩となるであろう。

● 都市に刻み込まれた観賞空間の粋

園芸の思想と技術を、疑似的な自然の観賞空間へと高度に昇華させたものが、現在も豊かな緑を湛えつつ、様々な表情を見せる大名庭園である。
都内に受け継がれた空間の多くは、地域に開放されている。須藤公園（文京区）や有栖川宮記念公園（港区）では、斜面地に生い茂る落葉樹と、池の周りを彩る花々が、鮮やかな四季の情景を紡ぎ出す。ここでは、周囲の住宅街の日常風景に溶け込みながら、古の主の視線が追体験される（図6）。
海岸に面する広大な屋敷地に造営された芝離宮庭園（港区）は、埋立地に立ち上がる高層ビルに囲まれた敷地に、変わらぬ緑と、意図に満ちた回遊式の観賞空間を継承している。現在はオフィス街の庭としての側面をもつこの場所には、会社員たちが穏やかな昼休みを過ごすためにやってくる。
休息者は、機能的に管理された空間での定期的な時の流れから、突如として、有機的で柔軟に移ろう時空へと放り出される（図7・8）。季節感の漂う芳醇な庭園文化に思いを馳せる中で、都市生活の活力が涵養される。

● 雑木林が映し出す風土の記憶
単なる観賞対象としての枠組みを越え、大きな自然の営みを伝えてくれるのが、都市に残された樹林地である。近代に見出された、雑木林に代表される武蔵野の風景は、土地を開墾し住み続けるために、自然と人為を調和させながら生み出された風土の景である。
それらの断片は、宅地化が進んだ東京近郊を中心に、様々な形で埋め込まれている。住宅地の一角に残された屋敷林や鎮守の森、あるいは井の頭公園のような開かれた緑地において、武蔵野の面影に接することができる。
クヌギ・コナラ・ケヤキ等の高木とササを等の下草から成る景は、玉川上水においては線状に連なる。中でも小金井公園付近では、流れの両側に植えられた著名な桜並木に封じ込められるように、雑木林が生い茂り、上水沿いを通りゆく人々に、四季を通じて様々な表情を見せる（図9）。それは、かつての武蔵野の四季の再現でもある。
植物を繁茂させる余地を備えた空間は、都市の記憶と大きな時の流れを構想する芽を宿しているのである。

図8 芝離宮庭園の昼休みの情景



図7 芝離宮庭園周辺

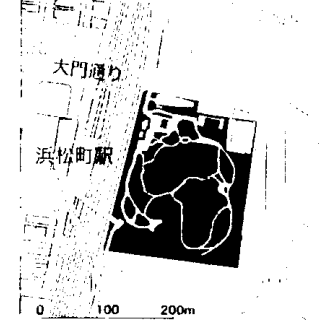
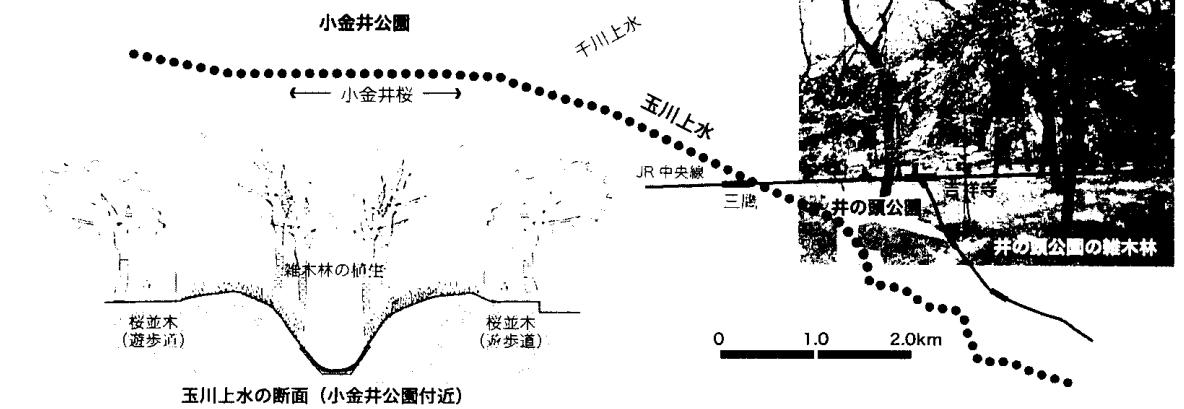


図6 有栖川宮記念公園



図9 玉川上水の位置と断面



●移ろいゆく一瞬の夕照がまちに生け捕られる

わずかな時間で移ろい消えていく、しかし太古から何度も何度も繰り返されてきた暮色の情景は、都市を包み込む永遠性を象徴している。東京では、夕照は富士見の景と重ね合わされて、より強く美しくなる。

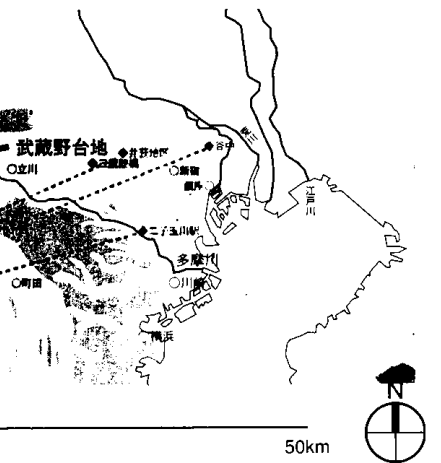


写真1 二子玉川駅からは丹沢山地の向こうに日が沈む様子が眺められる

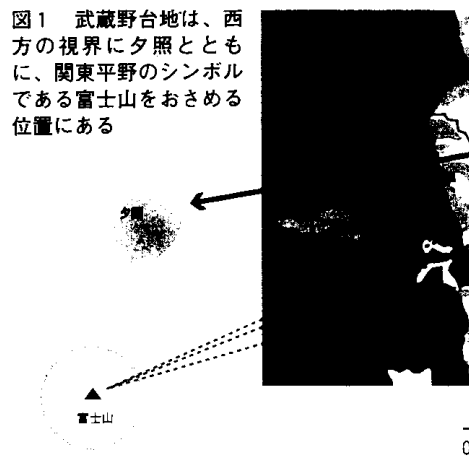


写真2 三鷹陸橋から西方を眺める。日暮れ時、夕照の雄大なスペクタクルが見られる



●夕照が生み出す都市の情景
夕焼け空を背景に立ち上がる東京タワー。「Always 三丁目の夕日」を持ち出すまでもなく、夕暮れの情景は、人々を感傷的な気分させる。時間にすれば僅か「一瞬」の現象だが、低高度から差し込む太陽光が演出する空の色の移ろい、徐々に具象を失い、終に姿を消していく町並みや山並み、その一方で強烈な存在感を最後に誇示する赤い太陽は、流れゆく時の儂さとともに、太古から変わることのない「永遠」の繰り返しを強く印象付ける。そして、この夕照を背景としたとき、都市のランドマークは普段よりもいっそう鮮明に象られる。

多摩川上にホームを持つ東急線の二子玉川駅なども絶好の視点場であるホームに降り立った人々の眼前に、僅かな一瞬、言葉に表しがたい強く美しい情景が現れて、消える。

東京の夕照は、その立地や地形と共鳴して、情景を営む。例えば、区部の西端を流れる多摩川の東岸は、武蔵野台地が迫って河岸段丘となっている箇所が多い。隅田川や荒川などの江東の低地に注ぐ河川にはない地形的特徴である。この河岸段丘の頂きからの一番の眺めは、西方、暮色に染まる多摩川の水面と対岸のまち、更にその向こうの丹沢山地、そして時に富士山までもが夕陽に縁取られた時のそれである。

●落日の美が武蔵野を象る
東京の西郊、武蔵野台地は夕照によって強くイメージされてきた。国木田独歩は「武蔵野」の中で、「広い平原の林が限なく染まって、日の西に傾くとともに一面の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか」と落日の美を称揚した。

自伝的小説「東京八景」で、「武蔵野の夕陽は、大きい。ぶるぶる煮えたぎって落ちていく」と書いたのは太宰治である。太宰は中央線三鷹電車をまたぐ陸橋から沈み行く夕陽をよく眺めていたという。今も健在のその陸橋に夕刻に立てば、武蔵野台地上を東西に直線で走る路線の形状と電車の影がらみがもたらす西方への開けた眺めを、斜陽の太宰の記憶とともに夕映えの情景として味わうことができる。しかし、おそらく、太宰だけではない。西方に向かって開けた武蔵野台地で暮

かつて下る階段状の坂道は、「夕焼けだんだん坂」と名付けられ、親しまれている。まちの地形と方位が、この坂道を谷中の懐かしさ、変わることにない永遠のイメージの象徴としている。

図2 西向きへの見通しの良い街路が連続して現れる(杉並区善福寺一丁目付近)。関東富士見100選にも選出された

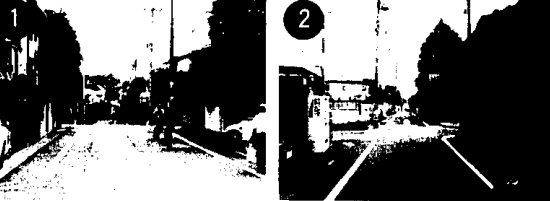
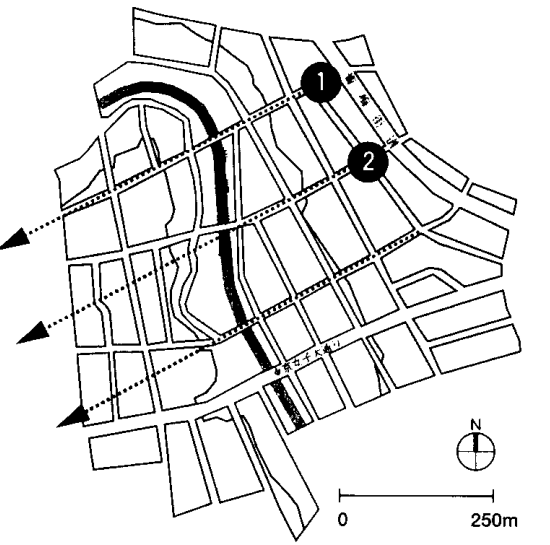
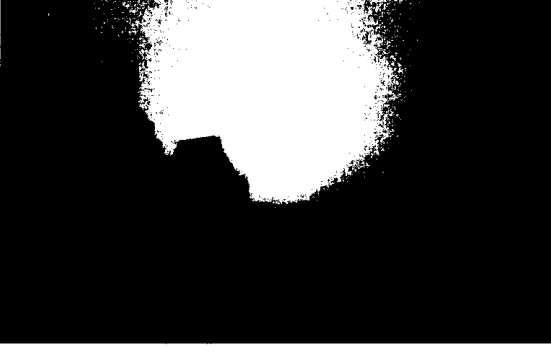


写真3 谷中の日暮里富士見坂から眺めるダイヤモンド富士(上)と鑑賞のために集まった夕陽に照らされる人々(下)



(出典:「日暮里富士見坂を守る会ホームページ」<http://fujimiza-ka.yanesen.org/> 何れも石川正氏撮影)

●まちを包み込む夕照をまちが生け捕る
武蔵野台地の東端にも、夕陽に包み込まれたまちがある。情緒ある寺町と昭和の活気を持つ商店街が健在の谷中(台東区)である。駅から商店街に向かう入り口の、台地を正確に真西に向

魅力的な都市とは何だろうか。その回答は様々にあり得るが、自然の摂理が生み出す永遠の情景をしっかりと捕まえて、生かしている都市、というのが一つの構想的回答であることは間違いない。(中島直人)